

審査の結果の要旨

氏名 有井 優太

校内授業研究は、日本の教師の学びを支えてきた重要なシステムであり、国際的にも注目を集めている。本論文は、そのような校内授業研究の実践を支える主体として、各学校に設置されている研究推進組織に着目する。すなわち、校内授業研究における研究推進組織の動態を解明することが、本論文の目的である。本文はⅣ部 9章で構成されている。

第Ⅰ部では、本論文の問題と目的が示されている。第1章では、先行研究をふまえ、研究推進組織の内部過程を明らかにすることと、研究推進組織のリーダーシップと教師の学習の関係を明らかにすることが課題として示されている。第2章では、方法として、特定の市の公立学校を対象とした質問紙調査とその市の一小学校の事例研究を行うこと、事例研究において定量的分析と定性的分析を組み合わせることが述べられている。

第Ⅱ部では、研究推進組織の内部過程が検討されている。第3章では、一小学校での質問紙調査とインタビュー調査を通して、研究推進組織の教師が校内授業研究に関わる専門知を保持して校内授業研究を主導するとともに、多様な教師の専門性を組織に還元したり、学校外部の資源を活用したりして知識創造を促していることが明らかにされている。第4章では、研究推進組織の会議体をテキストマイニングの手法で検討し、研究主任以外のアクターも重要な役割を果たしていること、議論が年度を超えて緩やかにつながっていることが示された。第5章では、研究推進組織に所属する一人の教師の4年間の経験の語りから、研究推進組織というコミュニティとそこでの学習の様相を描き、授業に関する実践知の形成と教師の学習を支える実践知の形成が不可分な関係にあることが指摘された。

第Ⅲ部では、研究推進組織のリーダーシップ実践の様相が検討されている。第6章では、市内の小学校の教師を対象とする質問紙調査を行い、校内授業研究においてどのようなリーダーシップが有効かを、Nonaka & Takeuchi (1995) のSECIモデルの4つのフェーズに対応させて検討し、分散型リーダーシップによって多くの構成員を巻き込むことの重要性を明らかにした。第7章では、事例校の研究推進組織に所属した教師8名へのインタビュー調査を行い、ハイブリッドリーダーシップの概念を手がかりとして校内授業研究におけるリーダーシップに迫り、組織的な知識創造の複雑なプロセスを解明している。第8章では、事例校の教師5名へのインタビュー調査を通して、研究推進組織が企画・運営する校内授業研究システムと教師の学習の関係を検討し、研究推進組織のリーダーシップが組織ルーティンを媒介として教師の学習と相互的な関係にあることを示した。

第Ⅳ部第9章では、以上の知見をふまえて研究推進組織の動態を整理した上で、本研究の意義を、教師の学習を支える実践知を解明したこと、教師個人の学習と学校組織の変革の関係を問うたことに求めている。

これまで校内授業研究については、教師の授業に関わる実践知の検討は行われてきたものの、そのような学びを推進することに関わる実践知の創造がどのように行われているかということは検討されてこなかった。その意味で、本研究は高いオリジナリティを有している。また、本研究が、6年間という長期にわたって一つの学校でフィールドワークを行い、多様な方法を用いて研究推進組織に迫った点も高く評価された。

よって、本論文は博士（教育学）の学位を授与するにふさわしい水準にあるものと判断された。